

# 「現場が変わる！チームに働きかける母性看護 CNS の実践」（助産雑誌）より

【1月号】周産期領域における解決困難な事例にどう向き合うか？—母性看護専門看護師に期待される役割・機能  
 朝日大学 松原 まなみ



第1子出産後、産後うつ病、筋力低下を来す進行性の難病を発症し、通院治療を続けていた永田さん。その後、再婚・妊娠した永田さんは第2子の妊娠末期に疲労感と上下肢の脱力感が増悪して周産期センター入院。服薬を勧めても拒否する永田さんへの対応に、スタッフは困り果てていた。

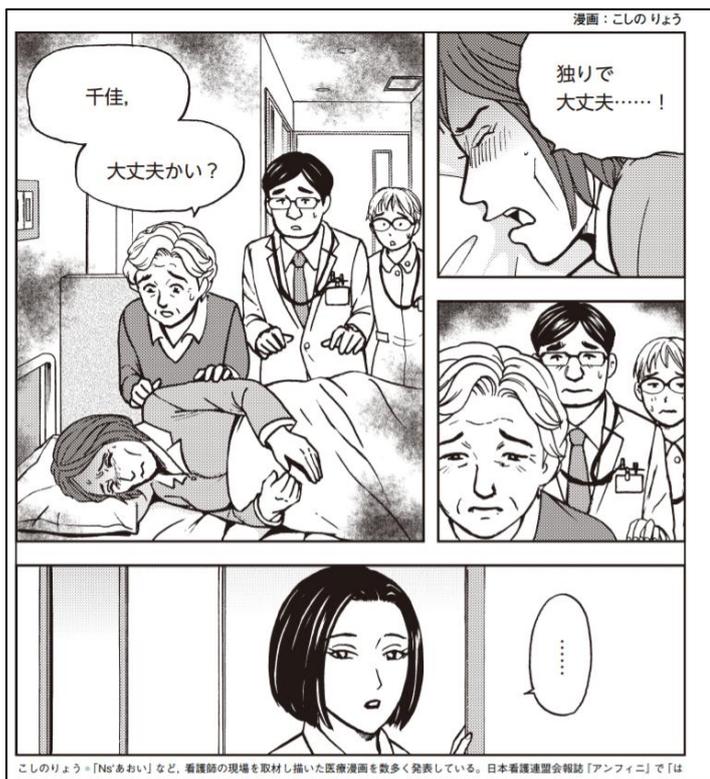
CNS はチームカンファレンスを開催して永田さんのサポート体制を協議。永田さんは前回の出産・育児を CNS と共に振り返る中で、不安は整理され、無事に出産を終えた。

本連載では、母性看護 CNS 田村百合子(仮名)の実践例をスタッフ(飯田助産師)と共に紹介する。初回は、母性看護 CNS の機能、資格認定制度、助産師のキャリアパスについて解説している。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年01月号をご参照ください(バックナンバー購入可)。  
<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38646>

【2月号】ケアの成果を実感し、看護への自信を深める：  
 母体炎症性腸疾患(IBD)・胎児心奇形を合併した妊婦の事例を通して

名古屋第二赤十字病院 立松 あき



高年初産、妊娠9か月の相田千佳さん(仮名)。原因不明で治療法未確立のIBD(炎症性腸疾患)を合併している。児が出生後に心臓手術予定であること、母体の低栄養、炎症反応上昇、切迫早産徴候出現により、入院となった。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年02月号をご参照ください(バックナンバー購入可)。  
<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38647>

[3月号]チームで実践、ウィメンズヘルスを支える継続支援:選択性緘黙のある妊婦への関わりを通して

済生会新潟県央基幹病院 吉森 容子



友田さんは意思疎通困難、発達障害疑いでクリニックより紹介された。会話できるのは夫のみで、自傷行為もありスタッフは困惑、CNSは相談を受けた。CNSはスタッフとカンファレンスを重ね友田さんと夫と信頼関係を築きながら、地域や多職種と調整をはかり、無事に出産を迎え、母子にとっての安心・安全な養育環境を整えた。そして組織に働きかけCNSの専門外来(ウィメンズヘルス外来)を立ち上げ、継続した友田さんの産後支援に繋がった。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年03月号  
をご参照ください(バックナンバー購入可)。

<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38648>

[5月号]地域連携体制の構築とケアの標準化へのスタッフ育成:チームの設立と地域保健師の連絡協議会の開催

医療法人竹村医学研究会(財団)小阪産病院 金 英仙

草津総合病院 三田村七福子



妊産婦さんを取り巻く背景やリスクが多様化している今、妊娠期～育児期とシームレスにサポートするためには、地域保健師さんとの連携は不可欠です。今回、この連携体制のために市/保健所/保健センターと発足した『母子支援ネットワーク連絡会議』、院内のケア標準化(当たり前のケアに)を目指したスタッフ育成など、CNSが院内外で5年間にわたり計画的・段階的に取り組んだことやその効果を報告する。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年05月号  
をご参照ください(バックナンバー購入可)。

<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38650>

## [6月号] グリーフケアに不慣れなチームとスタッフを支えるための CNS の介入:

### 出生前診断で致死性疾患を指摘された事例

国立大学法人 滋賀医科大学医学部附属病院 中井 愛



羊水過少のある椿さんは、児が新生児死亡になるかもしれないと告げられ落胆した。気持ちの整理が進まない椿さんに、CNS は悲嘆の過程を伴走しながら、残された期間に児とどう過ごすか考えられるよう妊娠期のケアを行った。その後、分娩となり、CNS は担当助産師から椿さんのケアの相談を受けた。CNS は、助産師が椿さんの流涙の意味や児への思いに気づき、ケアに反映できるよう支援した。直接ケア・調整・相談の機能を通して、一連の細やかなケアを提供できた実践例である。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年06月号をご参照ください（バックナンバー購入可）。  
<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38651>

## [7月号] 妊娠継続に迷う精神疾患合併妊婦のケアに戸惑う助産師に対するコンサルテーション:

### 被虐待歴による PTSD のある妊婦への妊娠初期から育児期までの支援

社会医療法人愛仁会 高槻病院 久世 宏美



実父からの DV や PTSD の既往のある初産婦の田中さん。自分の子どもにも親と同じことをしてしまうかもと語り、つわりの症状の辛さから中絶も考えていた。この田中さんを継続的に受け持つ山村助産師から相談を受け、CNS は、ハイリスク妊婦である田中さん、山村助産師の力量、さらに CNS 自身の力量のアセスメント(分析)を行い、患者中心のケースコンサルテーション実施の形でサポートしていくこととした。

山村助産師は PTSD について学びながら、田中さんに向き合い、田中さん自身が妊娠継続について意思決定することができ、CNS のサポートは終了した。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年06月号をご参照ください（バックナンバー購入可）。  
<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38652>

## [8月号]チェンジ・エージェンシーを発揮:

コンフリクトケースをチームで支援するシステム作り、専門看護外来の立ち上げ

宗教法人 在日本南プレスビテリアンミッション 淀川キリスト教病院 母性看護専門看護師 松浦 和枝



専門看護師に求められる高度看護実践能力を発揮し、コンフリクトケース(複雑で解決困難な看護問題を持つケース)へのチームケアの質向上のため、母性看護専門看護師による専門看護外来を所属施設内に開設するまでの活動を報告する。

現状分析や仲間づくりを行いながら、組織・時代のニーズに沿ったシステム変革を提案し、結果・成果を報告する事を通してCNSへの役割期待に添えていった。

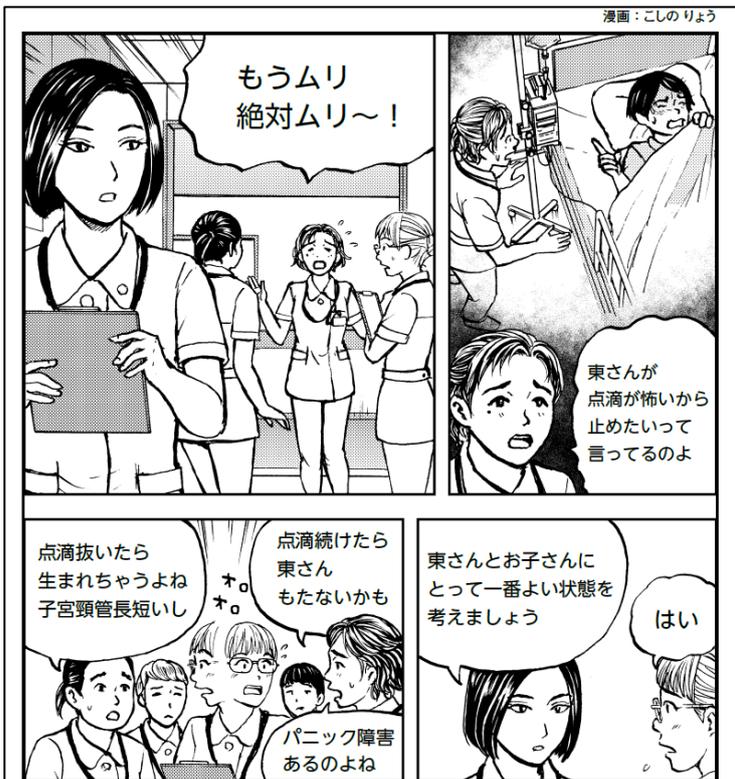
CNSがチェンジ・エージェンシー(組織の変革者)として活動した実践例である。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年08月号をご参照ください(バックナンバー購入可)。

<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38653>

## [9月号]点滴治療中止を訴えてきた切迫早産妊婦に 関わる倫理調整

山梨県医療的ケア児支援センター 母性看護専門看護師 八巻 和子



「いつもと違う」違和感、「それでいいのだろうか」とジレンマを感じる時、そこには価値判断があり、倫理的問題があるとされている。日々の実践でその問題に気づき、話し合いの俎上に載せ、対象者やメンバー同士の価値観、考えを出し合った上で、解決策を見出す、そういった話し合いをする雰囲気や組織文化は、所属組織、看護単位、あるいはチームにあるだろうか。母性看護専門看護師(以下、CNS)として切迫早産の点滴治療中止を訴えた妊婦へのケアを行った事例を提示し、チームとしての倫理的問題への対応について考えていきたい。

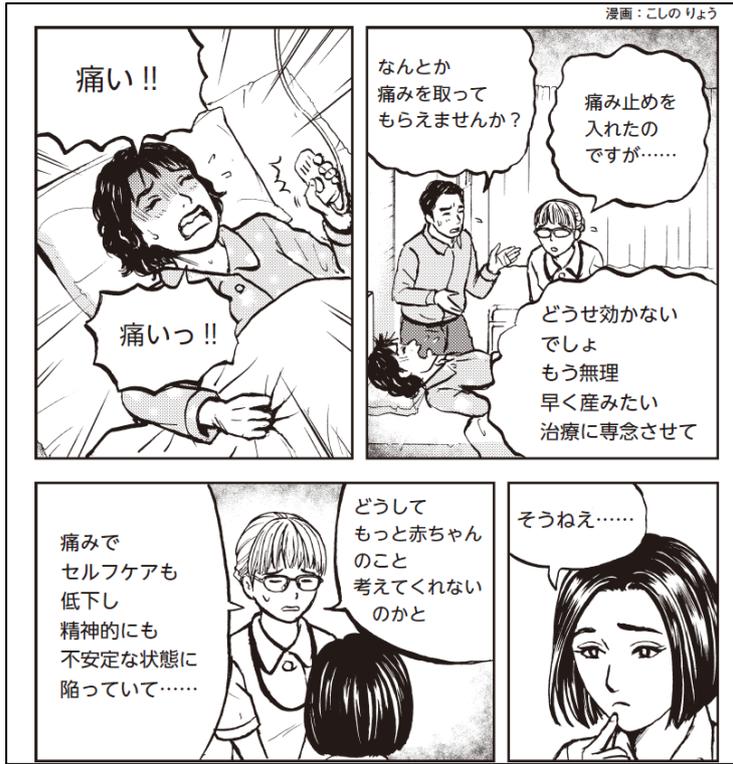
この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年09月号をご参照ください(バックナンバー購入可)。

<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38654>

[10月号]患者の思いとスタッフの思いの溝を埋めるための CNS の関わり:

強い疼痛を体験している妊婦の事例を通して

高松赤十字病院 増田 秋穂



篠原さん(仮名)、20歳代の初産婦。妊娠初期に泌尿器疾患を併発し、疼痛が増強したために妊娠24週で入院となった。入院後も疼痛コントロールが困難な状態が続き、精神的にも不安定な状態となり日常生活にも影響が及んだため、母性看護専門看護師(以下、CNS)だけでなく、精神科医や臨床心理士も介入した。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年10月号をご参照ください(バックナンバー購入可)。  
<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38655>

[11月号]特定妊婦の継続支援:育児習得に時間を要し、家族のサポート力が弱い褥婦に対する養育環境の調整

地方独立行政法人 佐賀県医療センター好生館 俵 由里子



妊娠高血圧腎症のため母体搬送され、すぐに出産となった初産婦の鈴木さん(仮名)。軽度の発達障害のため出産後の育児スキル習得がゆっくりで、養育の意思はかたいものの、頼りないパートナーと頼りたくない両親との間で揺れ動いていた。

CNSは、鈴木さんのペースに合わせて育児習得や意思決定を支援するとともに、病院と地域が連携し、鈴木さんが必要な支援を受け入れやすい状況を整えた。

中長期的なかかわりにより鈴木さんは、退院後も両親と地域の支援を受けながら自ら育児を行っていくこととなった。

この記事の詳細は、「助産雑誌」2019年11月号をご参照ください(バックナンバー購入可)。  
<http://www.igaku-shoin.co.jp/journalDetail.do?journal=38656>

連載：助産雑誌(医学書院)



妊娠・出産・育児を支えるだけでなく、多様な女性の一生にわたってケアを提供するという、助産師の役割はかつてないほどに重要になっています。その役割を果たすためにどんな手段や方法があるのか、どんな考え方や知識が求められるのか、助産師から助産師に伝える架け橋となるような雑誌をめざしています。

2022年より出産写真家による写真を表紙とし、本文デザインをリニューアルして、より視覚的に理解できる、読みやすい誌面に生まれ変わりました。(ISSN 1347-8168)

隔月刊(偶数月)、年6冊

通常号定価: 1,980円(税込)

HP: <https://www.igaku-shoin.co.jp/journal/665>

事例漫画：こしの りょう



「Ns'あおい」など、看護師の現場取材し描いた医療漫画を数多く発表している。

日本看護連盟会報誌『アンフィニ』で「はなうた」、『週刊現代』では「銀行渉外担当竹中治夫」、「人生はバウンスバック」などを連載。

HP: <https://note.com/ryokoshino>